

はじめに

二一世紀に入って、日本の政治を分析する視点が、「政権交代」というキーワードに定着した感がある。二〇〇五年の郵政選挙で、小泉政権は三分の二以上の議席を獲得し、次の目標は二〇〇七年の参议院選挙に移った。しかし自民党の期待を根底からくつがえして、二〇〇七年の参议院選挙では、野党が五五年体制成立以後、初めて参议院第一党となった。野党、民主党が第一党に躍り出るや、政局は衆議院≡自民党優位、参议院≡民主党優位という、俗にいう「ねじれ現象」を引き起こしたのだ。

この自民党優位の衆議院と民主党優位の参議院の綱引きは、早晚政権交代にいたると予想されたものだ。二〇〇五年の衆議院選挙に勝利をもたらした小泉政権と、二〇〇七年の参議院選挙に勝利をもたらした小沢民主党代表の綱引きは、自民党においては安倍、福田、麻生、民主党においては小沢、鳩山に引き継がれたものの、一九五五年以来、細川政権以後の一〇カ月を例外として、日本の政治が経験したことのない政権交代の可能性が足音高くわたしたちの身近に迫った。

わたしのような団塊の世代は、学園紛争を引き起こし、無謀にも政権の転覆を試みたものの、それはあくまでもイデオロギー闘争の中での話であって、実際に自民党が野に下ることなど、目

にすることは不可能だと信じていたものだ。にもかかわらず、「政権交代」、すなわち自民党が下野する可能性が近づいている。その意味で、確かに「政権交代」をキーワードとして現代日本の政治を分析する必要性は、格段と高くなっている。

しかし、「政権交代」というキーワードが織りなす枠組みではなく、もうひとつの別の枠組みで日本の政治をみる必要があるのではないか。いいかえれば、「政権交代」というキーワードでは浮かび上がらせることのできない政治的現象が、現代の日本のなかに鮮明になってきている。すなわち、「政権交代」というキーワードが抽出できないもうひとつの日本の政治を分析する枠組みを創造する必要があるのではないか。その思いを集積させた結果として、この作品は描かれている。

では、もうひとつの枠組みとは何か。もう一度、小泉政権に戻ってみよう。実は、政権交代をかけた攻防とは別の文脈において、小泉政権がもたらした大きなパラダイム・シフトがある。それは「利益の政治」から「負担の政治」へと、政策の舵を大きく切ったというパラダイム変化だ。まさに時代の変化は、自民党か民主党かという政党の選択と同時に、いやそれ以上の重みをもって、新しい政治のパラダイムを必要としているのだ。

新しいパラダイムは、自民党支配から民主党支配への政権交代というシフトでなく、「利益の政治」から「負担の政治」へのシフトを必要としている点にこそ、わたしたちは一層大きな政治的関心を払わなければならない。その具体的状況は、以下のように描くことができる。

従来、自民党が長期政権を築きあげることができたのも、単純化して言えば、有権者に配分するパイの量を増やすことによって図られてきた。しかし一九九〇年から始まったバブル崩壊と、さらに二〇〇八年に始まった世界同時不況の波は、有権者にパイの配分を約束できる状況を一挙に粉砕してしまったのだ。

他方、このような政治的、経済的変化と歩調を合わせるように、少子化、高齢化、過疎化など、政治コスト、行政コストが膨大な規模で必要とされる政策的課題が出現してきている。このようなコストを、有権者は痛みを感じることなく負担することができのだろうか。

ケインズを待つまでもなく、一般に民主主義は赤字財政を生むといわれている。というのも、有権者にパイを配分することで集票機能を果たす民主主義にあつて、配分されたパイの経費＝コストを回収する政策を打ち出すことは、本来的にありえないからだ。

しかし時代は、年金問題、医療問題、少子化問題、さらに介護問題といった市民生活を支える根本的な場面で、コスト負担の増大を、有権者に肌身で感じさせ始めている。この場面では、政治は声高にコスト負担を有権者に求めることができるだろうか。

行政のムダを省くといった単純な政策だけではなく、市民生活を支えるためにどれだけのコストを支払う必要があるのか、市民は覚醒した感覚でその回答を待ち望んでいる。と同時に、経費ばかりを必要とする政治を必要としない、新たな市民生活を模索し始めているといえよう。その端緒は、さまざまな市民活動にみてとることができる。

政治への期待が薄らぐ時代を「失われた政治」として表現してみたのが、この作品だ。「失われた政治」は、それに比例して獲得された市民の自治が存在していることを描く必要があるのではないか。パラダイム・シフトは、政権交代の場ではなく、市民の場で、「利益の政治」から「負担の政治」へとという局面で起きている。「負担の政治」の時代にあつてこそ、初めて市民はコスト意識を基底として、自らの生活を自らの手で描ききることができるのではないか。この発想のもとで、市民はどのようにして暗いイメージの「負担の政治」に対して新しい夢をもって立ち向かうことができるのか、その可能性を描きたいという動機のもとに、以下の章は準備されている。

果たして、わたしたちは「失われた政治」の向こうに、政治を超える自立した市民の生活空間を創造しなければならない。

二〇〇九年六月

藪野祐三